

大学間連携共同教育推進事業 事後評価結果

連携の種類	地域連携	整理番号	19
取組名称	時代が求める新たな教養教育の京都三大学共同（モデル）推進事業		
連携校 ※下線部は代表校	京都工芸繊維大学、 <u>京都府立大学</u> 、京都府立医科大学		

大学間連携共同教育推進事業評価委員会による評価

[総括評価]

S：計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。

[コメント]

【教育プログラムの構築について】

本取組では、京都府内の3大学が設置形態を超えて連携し、「教養教育共同化」が進められた。その結果、連携校の教養教育科目を自大学の科目として取り扱うことができ、学生の科目の選択肢が格段に増えたこと、連携校間の学年暦を統一するなど、教養教育カリキュラムの充実を実現したことは高く評価できる。また、本取組で設置された教育 IR センターが主導し、質的・量的データを教育改善に生かしており、組織的な取組の効果が見られる点も評価できる。

【連携・実施体制の構築について】

新たに設置された京都三大学教養教育研究・推進機構の運営や参加大学のトップによるマネジメントなど、他連携事業のお手本と言えるマネジメント体制が構築されている点は高く評価できる。ステークホルダーとの協働については、財政的支援、人事面での支援、経済界との連携の強化など、他の取組に大きく水をあけている点も高く評価できる。ただし、連携校3校中2校の設置母体がステークホルダーであるという体制は、むしろ例外的だということも指摘しておく。外部評価の体制も適切に構築され、評価結果に基づく改善も行われている点も評価できる。

【成果の活用と今後の展望について】

教養教育の合同実施という点での成果は大きく、学会での発表を行ったり、他大学からのヒアリング調査に対応したりと情報発信も十分行っている点は評価できる。ただし、これだけの財政的支援を受けての取組実施は他県では現実的ではなく、波及効果の限界が未知数である。

補助期間終了後は、関連して建設された施設を活用し、今後も教養教育の合同実施が円滑に進むと思われる。特に、教育 IR センターによるデータ解析を教育の質保証につなげていく取組が期待される。また、学生による自主的な活動の支援は、特に単科大学の側にとって大学間の連携の効果が出やすいと考えられ、発展が望まれる取組である。